

## 漁業：歴史と文化

山が多く耕作に適した土地の限られた黒潮上の島、屋久島は、昔から海の幸を頼りにして生存してきました。海への感謝の表れは、伝統芸能や日本の七福神の一員である恵比須への信仰といった形を取り、つねに島の生活の一部となってきました。

### 漁業の進化

屋久島北岸の一湊で発掘された考古学的遺跡は、紀元前1万年から300年の縄文時代に遡ります。これらには魚の骨や貝殻の名残が含まれており、この島の住民たちが何千年もの間、豊かな漁獲に恵まれたことを示しています。十六世紀頃の主な漁獲はトビウオやカツオであり、トビウオの干物を江戸の幕府や薩摩藩（現在の鹿児島県）の殿様に進呈することが慣習となっていました。

十九世紀後半までには屋久島は年平均1,800キログラムの鰹節を生産しており、また毎年約四百万匹のトビウオの漁獲量が記録されていました。しかし、九州の薩摩半島からの漁船が屋久島沖の漁場を南へ向かって侵害し始め、魚の乱獲のために島の水域からカツオが徐々に姿を消していきました。その結果、島民はサバ漁へと切り替えたのです。1897年、屋久島からの参加者が全国博覧会において鯖節で賞を取り、以来、屋久島の鯖節は島の特産品となっています。1920年代後半までには、一つの工場だけで年間約4,500トンの鯖節の削り節を生産していました。

### エビス

エビスは豊漁の神様で、漁業の守護神として信仰されています。エビスの描写は一般に右手に釣竿を持ち、左手に鯛を持った姿をしています。漁師たちは、大漁の後にはエビスに感謝をささげ、不漁の後には豊漁を祈願します。この神の容姿は地域によって異なります。

一湊漁港には「浜エビス」として知られる二つの小さな祠が立っています。祠の一つは多孔質の岩でできており、鯛を抱えたエビスの像と首のない石像の両方を収めています。もう一つの神社は硬い赤みがかかった石でできており、中には小さな自然石が祀られています。鯛を抱えたエビスはカツオ漁の守護神であると信じられており、一方、自然石のエビスはトビウオ漁に幸運をもたらすと言われていました。海の石は水中で魚と良い関係を築いていたため、海の石を浜辺に海に面して置くことは魚を沿岸に引き寄せる、と長らく信じられていました。

一湊にあるもう一つのエビス像は屋久杉で作られており、「町エビス」として知られる小さな石の祠に祀られています。村人たちはこのエビスに商売繁盛を祈願します。極めて貴重な屋久杉材の使用は、島民のエビスへの畏敬の念を表しています。

島の南東海岸にある麦生港を一体の木彫りのエビスが見渡しています。その顔立ちの良さと鮮やかな彩色から、このエビスは「美男恵比寿」として知られています。毎年一月

10日にはこの恵比寿の恵みと加護に感謝し、また海での安全と豊漁を祈願する祭りが行われます。エビスは通常鯛を抱えていることが多いのですが、このエビスはカツオを抱えています。これは、江戸時代（1603～1867年）にカツオ漁が盛んになった後、本土からエビス信仰が伝えられた際に見られるようになったものです。

#### トビウオ招きの踊り

「トビウオ招き」は、大漁を祈願するために永田集落で行われる伝統的な女性の踊りです。仏陀の誕生日が祝われる旧暦の四月8日（現在の暦では五月上旬から中旬）に、人々は浜辺で仏陀に祈願し、その後、河口にあるエビスの祠を訪れます。女性の演者たちは、トビウオを召喚するために歌いながら、葉っぱや、菅（スゲ）の笠や、色のついた吹き流しで飾られた竹竿を振ります。この儀式に似たものは南方の奄美大島や台湾付近の島々でも見られます。この伝統的な踊りの実演は永田でトビウオがもはや獲れなくなったときに途絶えましたが、観光客向けの催し物として最近復活してきました。